



『開学30周年記念誌』の発刊によせて

学 長 小 野 武 年

富山医科薬科大学は平成17年10月1日に開学30周年を迎えることになっていました。私はこの30年間に様々なことに会い、いろいろな方にお会いし、多くの素晴らしい先輩、同僚、学生に恵まれました。そして今は、これらの方々の献身的な努力と創意により築かれたこの素晴らしい富山医科薬科大学があることを大きな誇りにしています。これらのことを思うと、大学、県、市はじめ関係各位と仕事に感謝の念でいっぱいです。本学の開学10周年および20周年記念式典・祝賀会は、それぞれ昭和60年10月および平成7年10月に行われており、奇しくも開学30周年記念日の10月1日に新富山大学が発足し、13日には開学記念式典・祝賀会の開催がすでに確定していました。法人化と1年半後の新富山大学の開学による膨大な仕事量の増加や複雑な問題もあり、役員会、医学部同窓会、薬学部同窓会、事務局などの関係各位との間で本学開学30周年記念事業を行うことの是非、規模などについて意見の調整を行い、30周年記念・祝賀会も規模は小さくても、平成17年8月27日に行うことにしました。また、『開学30周年記念誌』は、平成18年3月末日を目途に発刊することになりました。

まず、記念式典では、学長が本学の誕生にご尽力いただいた永井道雄元文部大臣はじめ関係各位への謝辞とともに、最近10年間の教育、研究、診療面での輝かしい業績の概要を述べました。また、21世紀の予測の非常に難しい時代にあっては、本学教職員の崇高な精神、自信、勇気、先見性、そして決断と実践の必要性を述べ、最後に、ご来賓、本学の諸先輩の方々に新富山大学へのご指導とご鞭撻をお願いしました。ついでご来賓の祝辞をいただいた後、江崎玲於奈先生にご自身が1973年ノーベル物理学賞を受賞されるまでのご体験に基づいた「限界への挑戦」と題した「好きこそものの上手なれ」「自分の天分と特質を見つけることが挫折や失敗を乗り越え、前向きに生きる秘訣であること」など、開学30周年にふさわしいご講演を賜りました。

さらに、本学入学10日目に最愛のご子息である西山敬人君を交通事故で亡くされた、西

山敬兼氏による「富山医科薬科大学西山敬人基金」設立のための多額の御寄附に対する感謝状および記念品の贈呈を行いました。これは私が常日頃、「人間独特の崇高な心と行為」として強調している「人のため、世のために尽くす」という行為を身をもって教えていただいたことに対する感謝の心を是非お伝えしたかったからであります。同様に開学30周年以前にも、本来の教育・研究に対する個人による、昭和61年の元富山大学長令夫人、横田愛子氏による富山医科薬科大学横田基金、平成9年、10年の（株）セイジョー取締役、斉藤正巳氏による薬学部斉藤正巳奨学資金、それぞれの設立のためにご寄附いただいた両氏にも感謝状を贈呈しております。祝賀会では、県内のご来賓、諸先輩をはじめ、本学の30年間に関わりのあった人などのご臨席を賜り、30年間の思い出や現状、将来について和やかな雰囲気の中で話に花が咲いていました。

この『30周年記念誌』には、10周年、20周年記念誌と同様に、各部局長、各講座主任や事務局の各課長による本学の組織改革、施設整備、入学選抜、教育改革、国際交流あるいはトピックスなど、主に本学の最近10年間の歩みが記載されています。一般に記念誌の「序文」では、大きな出来事を記録に残すのが通例であるようですが、この機会に本学の様々な出会いの中で、少数の教員有志が関わった地味で目立たない2例を何かのお役に立てばと思って紹介します。本学の初代の平松博学長、大島敏雄事務局長の頃になりますが、キャンパス内の宿泊施設、電子計算機室のことは大学の建築・設計の初期の段階では計画になかったと記憶しています。しかし、教員有志の強力な要望を認め、平松学長のとき、職員会館が建てられ、ついで2代目の佐々學学長のご尽力により国際交流会館が建てられました。電子計算室も実験実習機器センターを含め、どこにもありませんでしたが、平松学長、大島局長や初代の小林収副学長のご尽力により、昭和55年に県の協力会からの資金によって、小型の電子計算機 PDP11/34 (DEC) が購入されました。その後、教員有志、佐々学長と3代目の山崎高應学長のご尽力により昭和63年に中型の電子計算機 MicroVAX II システム (DEC) が導入されました。そして4代目の佐々木博学長の下、下林正実司計課長と少数の教員有志の努力により、キャンパス情報システム構築、運用がスタートし、平成6年3月、学内 LAN 設置を計画し、同年8月には学内 LAN による E-mail 送受信が可能となりました。職員会館、国際交流会館、情報処理センター（学内 LAN を含む）の設置がなかったら本学の運命はどうなっていたであろうかと思うと背筋が寒くなる思いです。何事にも全学的な広い視野に立った先見性の重要性が痛感されます。この先見性は、教育、研究および診療面での地道な努力を積み重ねることにより身につくものと

信じています。この機会に全教職員の皆様が肝に銘じていただければ幸いです。

本学は今や西洋医薬学と和漢医薬学の融合、神経科学（情と意）、免疫、プロテオミクス、先端的医療が生命科学分野の看板として国内外に知られています。新大学でもこの30年間に築き上げた世界に誇れるこれらの看板、伝統と学風を継承していただき、さらに各分野に情熱を持った逸材が揃っておられますのでそれらの方々が一丸となって、（新）大学を発展させていただくよう切に念じています。関係各位におかれましては、（新）大学が輝かしい未来を切り開いていくために絶大なお支援とご鞭撻をお願い申し上げます。終わりに本記念誌の白木公康編集委員長、ご寄稿下さった方々ならびに関係各位のご努力に深甚の謝意を表します。